

十九世紀の広東語(1) “的”

竹越美奈子

<まえがき>

十九世紀広東語は、国際貿易都市香港の発展とそれに伴う大幅な人口流入により、わずか百年あまりの間に劇的な変化を遂げ、現在の広東語の形成に大きく影響した。またこの時代には外国人（宣教師、貿易商人、外交官など）の広東語学習のニーズに応じて多くの教科書や辞典、文法書などが編纂された。十九世紀粵語の研究は、このように豊富な資料が利用できるという魅力もあり、いわゆる「早期粵語研究」として音韻・語彙語法の両面から最近二十年あまり、盛んに研究されてきた。小文は、早期粵語の語彙語法を中心に、これまでの国内外の研究成果を項目別に紹介する。

—

Morrison(1828)で“的”は普通話と同様に結構助詞として使用されるとともに、量詞としても使用されていた。現代広東語でも“的[tik]”は結構助詞としてややあらたまった場面で用いられ、“的”から派生した（と小文が考える）“啲[ti:]”は量詞として使われる。現代の量詞“啲[ti:]”の特徴は、複数のもや液体など数えられないものに対して特に量を明確に示すことなく使用するということである。これに対して十九世紀の量詞“的”は、対応する英語訳から判断すると、可算名詞（単数および複数）と不可算名詞の両方、すなわち単数、複数、可算、不可算に関わらずあらゆる名詞に用いられていた。以下は可算名詞の単数に用いられている——つまり現代広東語から見て違和感のある——例である。

- 1) It is not good.(lit. That thing not good.) 個的野唔好。[筆者注：個＝那、野＝東西、唔＝不] (Morrison1828:JAR)
- 2) Take care of this chest. 照應個的箱。(Morrison1828: TEA)
- 3) Who is that man? ---He is my Master's Cook's Brother. 個的人係乜誰?  
——佢係家主既厨子既大佬。[係＝是、乜誰＝誰、佢＝他、既＝的]  
(Morrison1828: WHO)
- 4) 有時個的人總係倚熟賣破鑊。Sometimes, that man places his dependance on an acquaintance buying his broken kettle. (Morrison1828: 貿易類全)

この傾向は、以下 Bridgman(1839)から Stedman & Lee(1888)まで、つまり十九

世紀末まで続く。(以下も可算名詞の単数に用いられた例)

- 5) 個的貨要乜價錢呢? What price do you want for this? [乜=什么]  
(Bridgman1839 : 46)
- 6) 開衣服櫃擰我個的絨衣服來。Open the wardrobe and lay out my woolen dress. (Bridgman1839:156)
- 7) 唔使漿個的睡衫。Need not starch the sleeping-dress. [唔使=不用]  
(Williams1842: 89)
- 8) 個的細蚊仔喺街拋石入嚟打爛嘅。[細蚊仔=孩子, 喺=在] A boy in the street threw a stone in and broke it. (Williams1842: 94)
- 9) 個的樹我種。 That tree was planted by myself. (Devan1858: 50)
- 10) 你想賣個的酒鑽唔呢? Will you sell that corkscrew? (Dennys1874:20)
- 11) 熄個啲蠟燭。 Extinguish that candle directly. (Dennys1874:49)
- 12) 你抄呢啲野。 I want you to copy this. (Dennys1874:54)
- 13) 個啲首飾係十分好睇。 That head-dress is very handsome.  
(Dennys1874:132)
- 14) You will have to learn the English alphabet first. 你先要學識箇的英國嘅字母就得。 (Stedman & Lee1888:51)
- 15) You must have been sleeping in a damp room. 你一定喺在的濕地方瞓睡嚟咯。 (Stedman & Lee1888:107)
- 16) I will give him a gargle to use. 我俾的藥水佢洗吓咯。[俾=給, 吓=一下]  
(Stedman & Lee1888:107)
- 17) What a nice view there is from this hill! 呢箇山的景緻真好咯。 (Stedman & Lee1888:131)

“的”が単数複数に関わらず使われていたことを裏付けるように、Devan(1858)では“呢的”の英訳を「This or these」、 “個的”の英訳を「That or those」としている。これは同書が“呢個”を「This」、「個[=那]個[=個]」を「That」と訳しているのと対照的である。

- 18) 呢的鎖匙。[呢=这] This or these keys (Devan1858: 50)
- 19) This : 呢個; This or these : 呢的; That : 個個 ; That or those : 個的  
(Devan1858 : 50)

しかしながら、このころから“的”は「何にでも使える」から「複数に使う」量詞へとシフトしていったようだ。Dennys(1874)は、「接頭辞“的”は名詞の前で少ない量を示す」(原文: The particle “的” before a noun signifies *some, a little.*) (Dennys1874:18)というように、“的”に不可算名詞と可算名詞に対して少ない量(すなわち、可算名詞でいえば複数)を示す機能があると指摘し、次のような例をあげている。

20) 唔好拈個的墨水去。Don't take away that ink. (Dennys1874:18)

それでも、上の例文(10)-(14)のように、同書中には“的”を単数で訳した例があげられており、“的”の単数用法が完全に淘汰されてはいないことがわかる。発音と漢字に関しても、Dennys(1874)以降はそれまでの[tik55]がすべて[ti:55]に統一され<sup>1</sup>、現在使用されている漢字“啲”が出現した。

二

さて、Fulton(1888)と Ball(1888)以降、量詞の“的”はほとんど複数または不可算名詞に対して用いられるようになり——換言すれば単数の用法が淘汰され——、漢字は“啲”、発音はほぼ[ti:55]に統一された。これがそのまま現代広東語に踏襲されている<sup>2</sup>。ではなぜ、“的”は単数の用法を捨てたのか。そもそもなぜ結構助詞である“的”が量詞として使用されるようになったのか。それは広東語の文法と関係がある。

第一に、広東語はあいまいな量を表す量詞を必要としていた。広東語ではすべての名詞に対して量詞の使用が義務的である。たとえば、「この本」は普通話では“这本书”“这书”ともに可能であるが、広東語では必ず量詞を使って“呢本書”（\*呢書）と言わなければならない。さらに言えば、指示詞がなくても（“本書”「その本」）、名詞がなくても（“呢本係我嘅。”「これは私のです。」（これが本を指す場合。広東語の“本”は量詞））量詞は使わなければならない。しかし専用量詞はいずれも明確な量を表すものなので、特に量にこだわらずに「この本どうしたの？」とか「それなあに？」と気軽に言いたい場合大変不便であるし、水とか空気のように数えにくいものも言いにくい。こういうときにあいまいな量を示す量詞“啲”があると“呢啲係咩呀？「これなに？」”とか“啲學生好懶嘅。「学生が勉強しなくて…」”とか“啲水好汚糟。「水汚いね。」”のように大変に便利である。

第二に、結構助詞が量詞になったのにも広東語の文法が関係している。広東語では結構助詞と量詞の区別がつかないことがよくある。というのも、普通話とちがって所有構文と関係節に量詞が使えるからである。<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 実は Morrison(1828)も量詞と結構助詞の“的”の発音はすべて[ti:]である。（ちなみに同書で“的確”の注音が[tik kok]であることからわかるように漢字“的”の発音は[tik]。）Morrison(1828)の注音がそれ以後のものより革新的な理由は課題としたい。

<sup>2</sup> ちなみに現代広東語でも漢字“的”（発音は[tik]）は書面語として、またやや改まった場面などで普通話と同様に助詞として用いられている。量詞の“的”が[ti:55]という発音を獲得したのは助詞“的”と区別するためであろう。なお、広東語では普通話の“的”に相当する助詞は“嘅[ke33]”。

<sup>3</sup> 例文 21)22)の量詞はいずれも結構助詞“嘅”に差し替え可能であるが、量詞を使った方が口語的な感じでよく使われる。（Mathews & Yip 1994:110）

21) 我間屋（私の家）

22) 我哋喺法國食啲嘢（私たちがフランスで食べたもの）[我哋=我们，喺=在，嘢=东西]

その結果、“我的願望（私の願望）”のような構造における結構助詞の“的”を話者が“量詞”と再分析して、指示詞の後ろ（“個的野（ああいうもの）”=1))のように本来結構助詞が使えない構造にも“的”を量詞として使用するようになったのだと小文は考える。結構助詞がルーツのため、初めのうちは結構助詞同様、名詞の数に関係なく使っていたが、明確に単数であるなどの場合は専用量詞の得意分野であるため、単数の名詞に対する使用は専用量詞に譲り、現在のようにそれ以外、すなわち複数とかはっきり量を言う必要のないときに使われるようになった。

### 三

以上のような助詞>量詞への変化は一般的な文法化——実詞から虚詞へ——に逆行するのではないかという考えもあろう。実はこの実詞から虚詞へ、すなわち量詞から助詞へという変化は現在進行中とも言える。つまり数にこだわらずに使える便利な量詞“啲”の使用頻度が高いために、“啲”を結構助詞だと再分析している話者がいるのである。(彭小川 2006)このまま行くと、数十年後に“啲”は現在ある結構助詞“嘅”になりかわって新しい結構助詞となるか、あるいは“嘅”が「名詞が単数の場合の結構助詞」、「啲」が「名詞が複数の場合の結構助詞」というように両方で役割分担をすることになるかもしれない。

### “的”の変遷

		18世紀まで	19世紀前半	19世紀後半	20世紀
助詞	口語	嘅 ke			
	書面語 i)	的 tik			
量詞	複数 ii)		的 tik	啲 ti:	
	単数				
		専用量詞			

i)あらたまった場面、たとえば作文などを書く場合に普通話の文法で書いて、広東語の発音で読むなど。前頁脚注 2)参照。

ii)液体、気体、粉など数えにくい名詞を含む。

早期粵語資料(arranged chronologically)

- Morrison, Robert .1828 Vocabulary of the Canton Dialect. Macao: G. J. Steyn & Brother.
- Bridgman, E.C. 1839 A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect. China: S.Wells Williams.
- Williams, S. Wells. 1842 Easy Lessons in Chinese. Macao : Office of the Chinese Repository.
- Devan, T.T. 1858 The Beginner's First Book, or Vocabulary of the Canton Dialect. Hong Kong: China Mail Office.
- Dennys, N.B. 1874 A Handbook of the Canton Vernacular of the Chinese Language. London : Trübner & co./ Hong Kong: China Mail Office.
- Ball, J. Dyer. 1888 Cantonese Made Easy(2nd ed.). Hong Kong: China Mail Office.
- Fulton, A.A. 1888 Progressive and Idiomatic Sentences in Cantonese Colloquial (3rd ed.). Hong Kong : Kelly & Walsh, Ltd.
- Stedman, T.L. and Lee, K.P. 1888 A Chinese and English Phrase Book in the Canton Dialect. New York : Brentano's.

参考文献

- 彭小川 2006 《廣州話含複數量意義的結構助詞“啲”》《方言》2006(2), pp.112-118.
- MATTHEWS, S. & V. YIP. 1994 Cantonese. London & New York: Routledge.
- Tansiri. 2009 Relative Clauses in Wuming Zhuang. Proceedings of the Chulalongkorn- Japan Linguistics Symposium. Tokyo. 117-129.